

2020年8月吉日

報道関係者各位

ご案内

「どうする？教えて！病院選びのポイントアンケート2020」結果速報
病院選び「困った」約8割。患者の約7割が2回以上の転院を繰り返す

NPO 法人 Fine (Fertility Information Network=ファイン) <https://j-fine.jp/>

不妊治療患者をはじめ不妊・不育で悩む人をサポートするセルフサポートグループ「NPO 法人Fine (ファイン)」は、このたび「どうする？教えて！病院選びのポイントアンケート2020」を実施し、5,140人の回答を得ました。

本調査では、その回答数の多さからも、不妊・不育治療の病院選びは当事者にとって大きな関心であること、しかし選択のための比較情報が乏しく口コミを頼りに選ぶ患者が多い現状や、転院経験者の69%が2回以上の転院をしていることなど、不妊・不育治療患者の迷いや病院選びの難しさが見えてきました。さらに、治療費の総額が50万円を超えた割合は、1度も転院したことのない人では48%と約半数であるのに対して、転院経験者では74%と、転院による経済的負担の差が大きなことも明らかになりました。

今回のアンケート結果を、まず速報としてお伝えします。詳細版につきましては、現在行なっております集計・分析が終了次第、あらためてプレスリリースを発行するとともに、不妊・不育治療の環境向上のために使用する予定です。

この結果をぜひ貴媒体で取り上げていただき、広く社会への周知を図っていただけますようお願い致します。

●調査概要●

■調査目的

不妊・不育治療患者の病院探しや通院にかかわる現状とニーズを把握し、必要な社会的サポートを明確にするため。患者一人ひとりが納得のいく治療を受けられるよう、治療環境の向上を図るため。またアンケート結果から当事者の声をまとめ、国に政策提言や要望書等を提出するため。

■調査期間：2020年4月27日～2020年7月31日

■調査方法：外部調査ASPを使用したWEBアンケート。自由回答を含む全38問

■対象者：不妊治療・不育治療をこれから受ける・受けたことのある男女

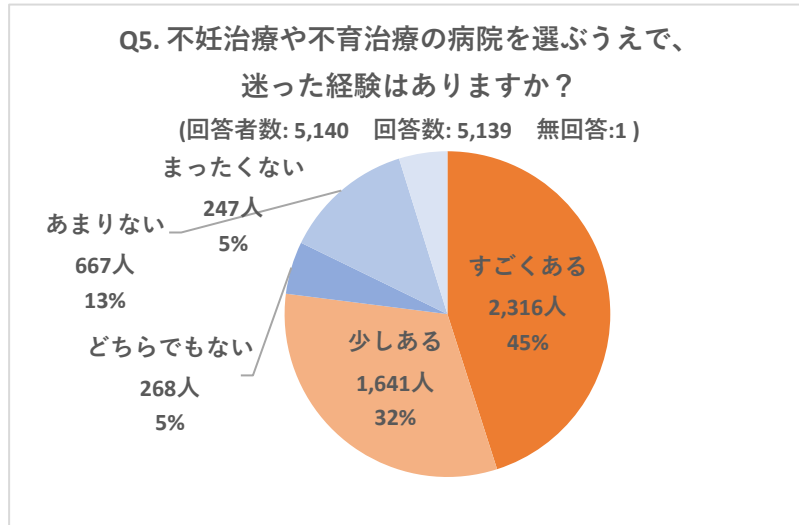
■回答数：5,140

●調査結果サマリー●

- 1) 病院選びに迷った経験がある人は77%
- 2) 病院を選ぼうと知りたい情報は「実際の患者の声・評判(口コミ)」(80%)、「治療費用」(74%)、「治療成績」(72%)
- 3) 転院した経験のある人は53%。検討中・検討したことはあるを含むと65%
- 4) 支払った治療費の総額は、転院したことが「ない」場合、半数(49%)が「50万円未満」と答えたのに対して、転院したことが「ある」場合は「100万円以上」が約6割。
- 5) 転院することのデメリットは「高額になった医療費」(54%)、「通院距離の長さ」(51%)、「検査の重複」(46%)
- 6) 転院したことで不利益を感じたことのある患者の生の声

1) 病院選びに迷った経験がある人は77%

Q5では、病院選びで迷った経験は、多い順に「すごくある」45%、「少しある」32%となっており、合わせて約77%の人が「迷った」と答えています。

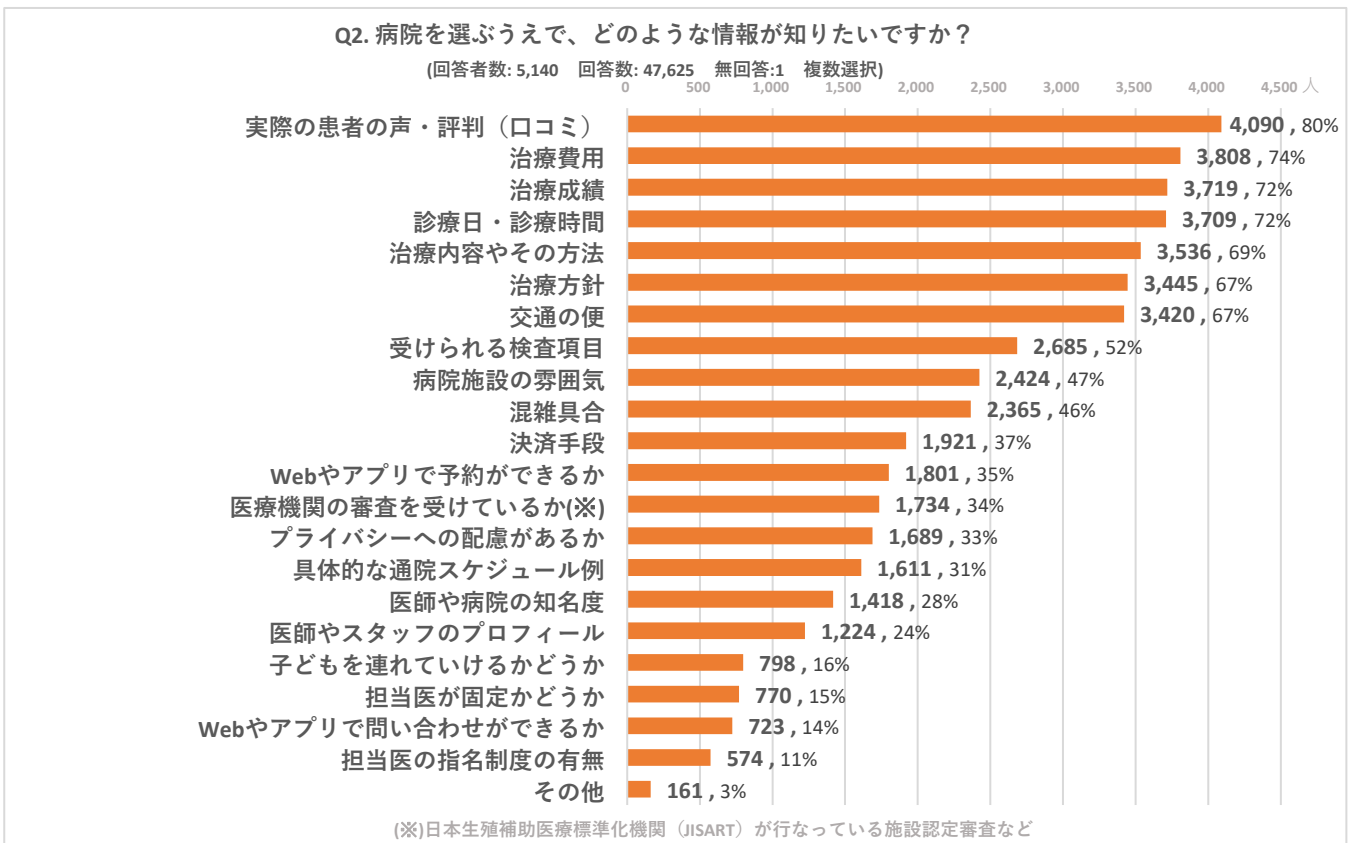


2) 病院を選ぶうえで知りたい情報は「実際の患者の声・評判 (口コミ)」(80%)、「治療費用」(74%)、「治療成績」(72%)

Q2: 病院を選ぶうえで、どのような情報が知りたいですか？

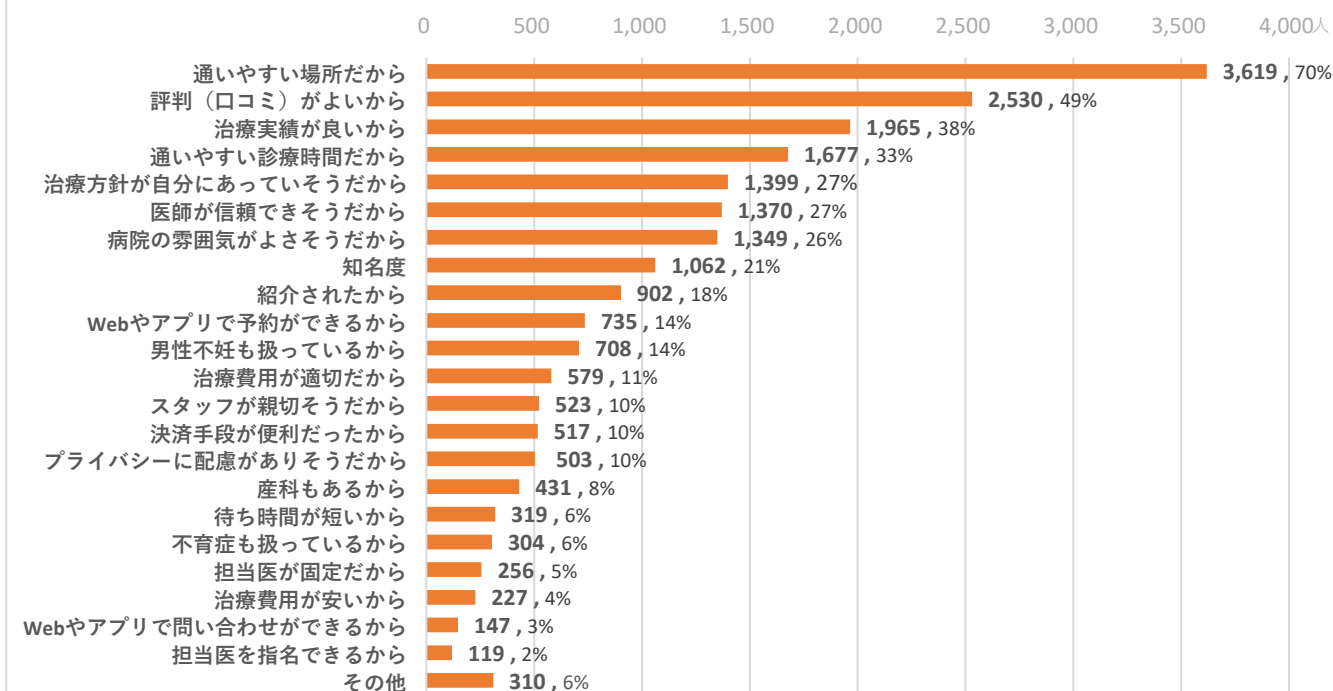
Q4: これまでに (今現在も含め) 病院を選ぶ際に、重視したことは何ですか？

病院を選ぶうえで最も知りたい情報は「実際の患者の声・評判 (口コミ)」(80%) で、次いで「治療費用」(74%)、「治療成績」(72%)と続いています。一方、Q4のこれまでに病院を選ぶ際に最も重視したポイントでは「通いやすい場所だから」(70%)、次に「評判 (口コミ) がよいから」(49%)と続いています。このことから、当事者は、病院を選ぶ際には「実際の患者の声・評判 (口コミ)」を重視していることがわかります。



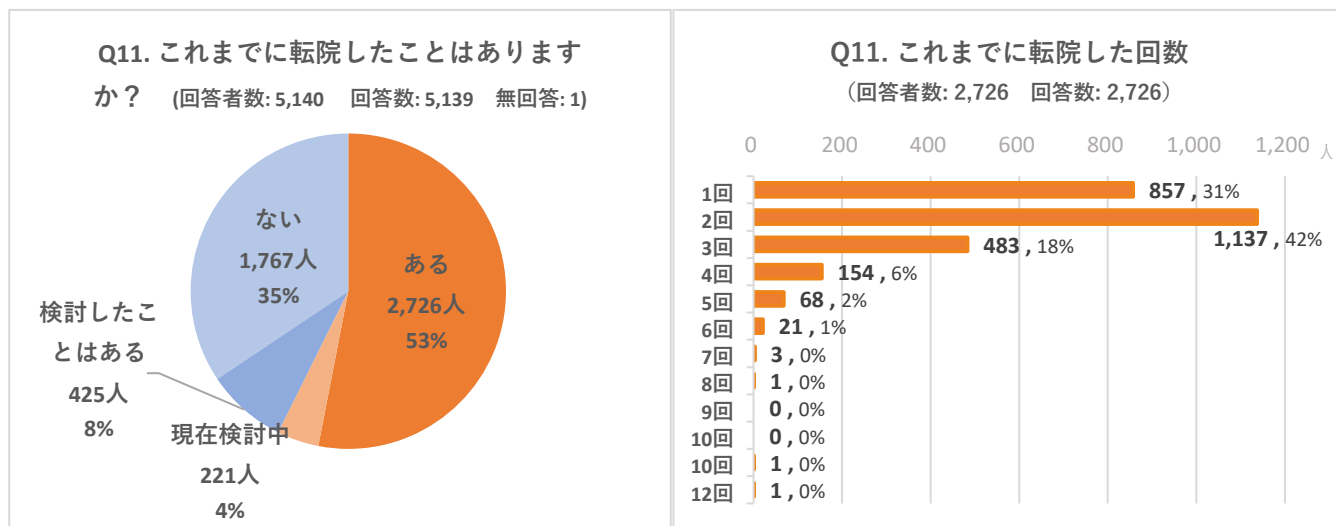
Q4. これまでに（今現在も含め）病院を選ぶ際、重視したことは何ですか？

(回答者数: 5,140 回答数: 21,551 無回答: 1 複数選択)



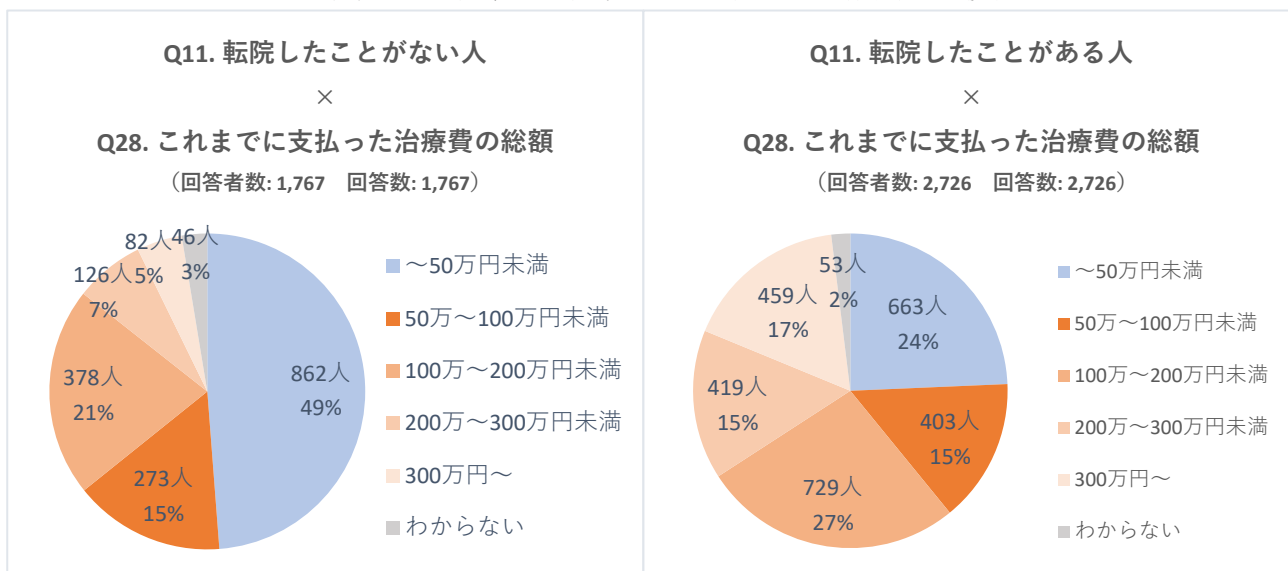
3) 転院した経験のある人は53%。検討中・検討したことはあるを含むと65%

Q11「これまでに転院したことはありますか？」では「転院したことがある」(53%)、「検討したことがある」(8%)、「現在検討中」(4%)でした。転院したことがある人のうち、約7割(69%)は2回以上の転院経験があることがわかりました。



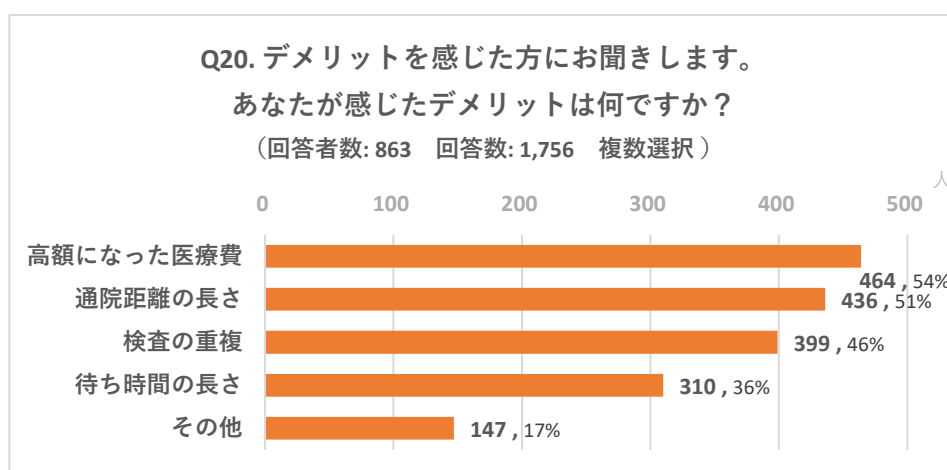
4) 支払った治療費の総額は、転院したことが「ない」場合、半数(49%)が「50万円未満」と答えたのに対して、転院したことが「ある」場合は「100万円以上」が約6割。

Q11で回答した転院したことが「ある」人と、転院したことが「ない」人で、Q28のこれまでに支払った治療費の総額を比較しました。転院したことが「ある」人のうち総支払額が50万円以上であったのは74%、転院したことが「ない」人は48%でした。



5) 転院することのデメリットは「高額になった医療費」(54%)、「通院距離の長さ」(51%)、「検査の重複」(46%)

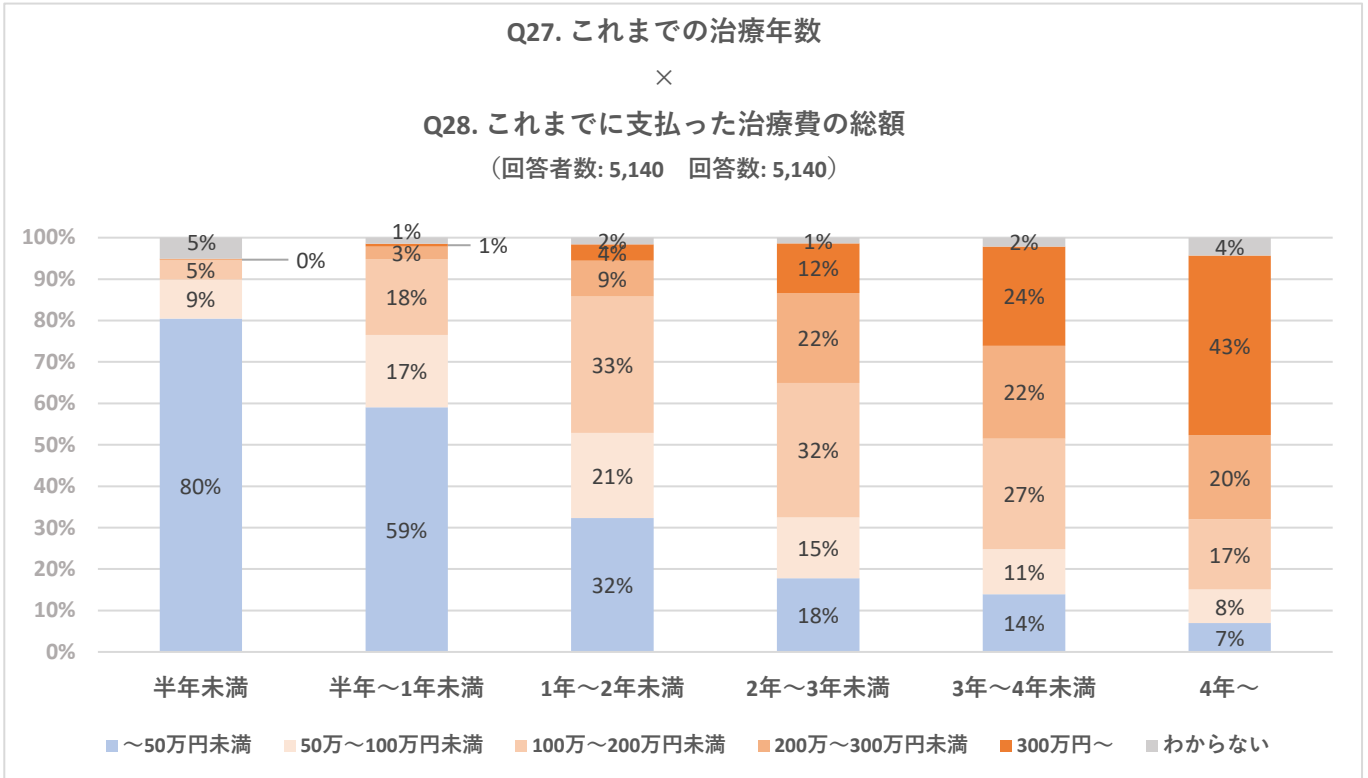
Q11で「転院したことがある」と答えた人を対象としたQ19「転院したとき、なんらかのデメリットを感じたことはありますか?」では、「感じた」(32%)、「感じなかった」(68%)という結果が出ています。デメリットを感じなかったと答えた人たちのコメントでは、「治療開始が40歳代近かったので、最初から不妊治療専門の病院にかかれば良かった」「前の病院ではできない専門の検査と治療を受けるため」など、おそらく転院はステップアップ(次の治療に進むこと)や現在の病院ではできない治療を行なうためになど、希望や期待をもって転院したのではないかと考えられます。一方「転院によるデメリットを感じた」と答えた人は3割超であり、Q20「あなたが感じたデメリットは何ですか?」の回答は、多い順から「高額になった医療費」(54%)、「通院距離の長さ」(51%)、「検査の重複」(46%)でした。



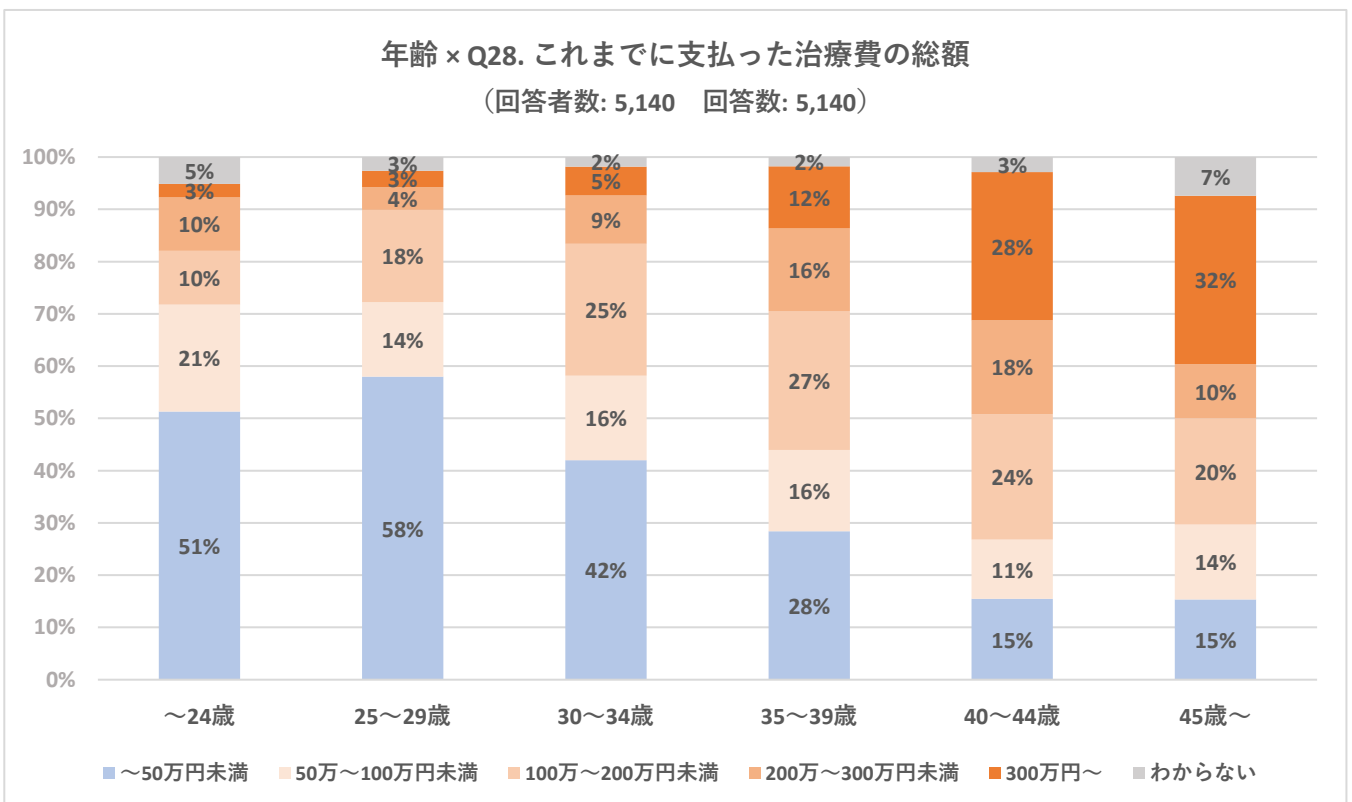
また、転院を繰り返すことにより、転院先で同じ検査を再度行なう、転院先探しでblankができてしまうなど、治療に要する期間が長引く可能性も考えられます。さらに、年齢を重ねることにもつながります。

Q27のこれまで治療年数とQ28のこれまでの医療費の総額を掛け合わせて比較したグラフで回答数が最も多かったのは、治療年数が半年未満では「50万円未満」が80%と圧倒的多数であり、治療年数が半年から1年未満になると「50万円未満」が59%と、治療年数が増えるにつれて「50万円未満」が減っていき

ます。つまり治療年数と比例して治療費は高額になり、4年以上では300万円以上が最も多く、4割以上(43%)を占めます。



Q28のこれまでに支払った治療費の総額を年齢と掛け合わせて比較した結果、年齢が高くなるほど治療費の総額が高額になっていることがわかります。これは年齢が若いほど「妊娠までの期間が短かった」とも考えられますが、「高額な治療費が払えず、治療を受けることができなかった」とも捉えられます。20歳代では50万円未満が約半数以上、45歳以上では300万円以上が32%以上と最も多くなっています。



6) 転院したことで不利益を感じたことのある患者の生の声 (抜粋)

- ・紹介状の内容があっても、結局また同じ検査を受けることになったのがお金のロスと感じました。
- ・各不育症専門医で治療方針や推奨する検査項目が違い、どれを信じたらいいかわからないこと。
- ・紹介状を用意してもらい(転院先に)渡したが、同じ投薬治療から再スタートした。その前のクリニックでは「長く飲み続けてはいけない薬」と言われていたものなので不安でしかなかった。
- ・紹介状に検査結果の内容が載ってないのか? 紹介先の病院でまた、いちから検査するのでその度にお金がかかり、悪循環。
- ・転院したい旨を相談した際にも暴言とぞんざいな態度を取られ、紹介状も拒否され精神的に負担だった。
- ・今までの治療をこと細かに説明しても、違った解釈で捉えられることもあるので難しかった。
- ・自分の生理周期と紹介状を用意する時期が合わなかったので1周期治療開始がズレた。
- ・治療の経緯、OHSS(卵巣過剰刺激症候群)やアレルギーなどの引き継ぎ不足。
- ・紹介先の大学病院の初診が2カ月待ちだった。
- ・同じ検査をやらなくてはならなかった。
- ・凍結受精卵が(転院先に)移動できなかった。
- ・治療期間と年齢の無駄遣い。
- ・卵子の移送のハードルの高さ。
- ・前院と方針が違っていると治療履歴を参考にしてもらえない。
- ・精神的不安。
- ・(転院先で)死産のことを一から説明しなくてはいけなくてつらかった。
- ・一番困ったのは医師によって意見が違うこと。
- ・紹介状をもらえなかったこと。
- ・これまでやって来た治療にかかった時間と労力。
- ・自分では今までの治療内容を伝えきれない。
- ・紹介状持参でも、毎度これまでの経緯の説明が必要。
- ・若いときの採卵した卵は、捨てることになった。

●考察●

今回の調査から、不妊・不育症治療の当事者が病院選びに悩み、困惑する姿がうかがえました。上記の生の声にもあるように精神的な負担も大きいといえます。転院に悩む現状についてが明らかになるとともに、経済面での負担も浮き彫りになりました。

以前からFineでも訴求している「不妊治療・不育治療の経済的負担」という点は、本データからも示されました。特に、単に年齢・治療年数を重ねることだけではなく、転院を繰り返すことも、治療費の増加につながると考えられます。実際に、転院経験者は「高額になった医療費」を最も負担に感じていることもわかりました。

このように、将来的な経済的負担および精神的負担へ大きな影響を及ぼすため、転院を含む病院選びは治療当事者にとって重大な決断であるといえます。しかし、病院を選ぶために必要な情報は不足しており、特に妊娠率など治療成績に関するデータについては公表されていない場合が多く、されていても施設ごとのデータを読み解くための基本となる指標がないため、当事者は口コミを主な情報源として頼らざるを得ないのが現状です。Fineは当事者団体として、今回の調査をさらに詳細に分析することで、治療当事者が求める治療環境とは何かをより深く探り、その環境を整えるために、引き続き国政に訴えていきます。

【不妊治療の現状】

日本で不妊を心配したことがあるカップルは 3 組に 1 組、実際に不妊の検査や治療を受けたことがある（または現在受けている）カップルは、5.5 組に 1 組といわれています(*2)。日本で体外受精や顕微授精などの生殖補助医療（ART）によって生まれた子どもは、2017年は56,617人(*3)を数え、その年の出生児全体の約16.7人に 1 人がARTにより誕生したことになります(*4)。さらに累積では約60万人がARTで誕生しています(*3)。

(*1)「どうする？教えて！病院選びのポイントアンケート」（2011年10月6日～2012年7月5日）

https://j-fine.jp/prs/prs/Fine_press_1208_byoin_ank.pdf

(*2) 国立社会保障人口問題研究所「第15回出生動向基本調査」（2015年6月）

http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_report4.pdf

(*3) 生殖補助医療による出生児数（2017年累計出生児数）は『日本産科婦人科学会雑誌第71巻第11号』より引用。

<http://fa.kyorin.co.jp/jsog/readPDF.php?file=71/11/071112509.pdf>

(*4) 2017年（平成29年）の出生数は、「人口動態統計」（厚生労働省）による。

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei17/index.html>

参考 URL : Fine 国政への働きかけ <https://j-fine.jp/activity/act/index.html>

～Fine 会員は約 2,400 名 Fine SNS 会員は約 1,950 名（2020年8月現在）～

NPO 法人 Fine (ファイン) <https://j-fine.jp/>
〒135-0042 東京都江東区木場 6-11-5-201 TEL 03-5665-1605 FAX 03-5665-1606
* 常駐ではありませんので、できるだけメールにてお問い合わせいただければ幸いです
E-mail ◆NPO 法人 Fine 広報窓口 : finekouhou@j-fine.jp